

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730207

研究課題名(和文)ピグー財政論の研究：理論と政策、および厚生経済学との関係

研究課題名(英文)Pigou on Public Finance, in Relation to his Welfare Economics

研究代表者

本郷 亮 (HONGO, Ryo)

関西学院大学・経済学部・教授

研究者番号：80382589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ピグー厚生経済学体系の一翼をなすピグー財政論を研究した。具体的には、20世紀前半の社会変動(社会保障の発展や両大戦)との関係、租税や公債に関する彼の理論分析、厚生経済学体系の中での位置づけを精査した。その結果、以下のことが明らかになった。

ピグー『財政学』各版(初版1928、第2版1929、第3版1947)の比較から、彼の財政論が当時の社会変動に応じて展開していることが分かった。同書の精査により、彼の財政理論が従来より明確化された。同書の第3版・第3編は、ピグー雇用論・公共事業論の完成形態である。

なお、ピグー『財政学』第3版の邦訳が順調に進み、2017年の出版予定である。

研究成果の概要(英文)：I have investigated the theory and thought on public finance. More specifically, (1) on the development of them in relation to social changes in the first half of the 20th century, (2) on his theoretical analysis on taxes and public loans, and (3) on the relation of them to his economic thought as a whole. The results are as follows.

(1) Each edition of A Study in Public Finance (1st edn. 1928, 2nd edn. 1929, 3rd edn. 1947) reflects social change of the time. (2) His theory of public finance was further clarified by scrutinization of the book. (3) The Part III of the book (3rd edn. 1947) is, in a sense, the completion form of the Pigou's employment theory.

In addition, Japanese translation of the book (3rd edn, 1947) is due to be published in 2017.

研究分野：経済学史

キーワード：厚生経済学 税 公債 国債 ピグー ケインズ革命 景気循環 公共事業

1. 研究開始当初の背景

(1) 厚生経済学の確立者、また「ケインズ革命」におけるケインズの論敵として、非常に有名な経済学者 A.C.ピグー (1877-1959) についての内在的研究は、その重要性にもかかわらず、非常に少ない。このことは、同じケンブリッジ学派に属する A.マーシャルや J.M.ケインズと比べれば、一目瞭然である。そしてこのことが、ケンブリッジ学派全体の展開を究明しようとするさいの、決定的な隘路にもなっていた。

(2) 21 世紀に入り、ピグー研究は内外で活発化しているが、未達成の特に重要な課題が 1 つある。それはピグーの財政論(理論と政策)の研究である。近年の研究によって、従来の定説を覆す力を秘めた多くの発見がなされてきたとはいえ、財政論の研究はまったく不十分である。ピグー財政論に関する従来の研究では、その関心が「歳入面」よりも「歳出面」に、また「理論」よりも「政策論」に、偏りがちだった。ピグー『財政学』(初版, 1928 年)の邦訳出版も視野に入れながら、その財政論の本格的なおこなう必要がある。

2. 研究の目的

(1) ピグーの財政政策論の展開: ピグー財政論は、20 世紀前半の激しい社会変動の中で展開した。例えば、第一次世界大戦前のいわゆる「リベラル・リフォーム」期には、救貧法改革(すなわち年金、医療保険、失業保険などの社会保障の整備)がなされたが、それは後の福祉国家への過渡期であった。また第一次大戦・第二次大戦の戦費がイギリスの国家財政を圧迫した。こうした歴史的課題に、ピグーはどのように対応しようとしたのか、その政策論の展開を明らかにする必要がある。

(2) ピグー財政論の理論面の究明: 各種財源調達手段(特に租税と公債)がもたらす経済的帰結を、ピグーは理論的にどのように把握していたのか。上述(1)の政策論を正しく理解するためには、その理論的側面の究明が不可欠である。

(3) ピグー厚生経済学全体の中での彼の財政論の位置づけ: ピグー財政論の研究は、(財政論を含む)厚生経済学体系に関するわれわれのこれまでの理解をどのように変化させるのか。すなわち彼の財政論は、厚生経済学体系の他の領域(資源配分論・分配論・景気変動論)とどのような関連をもつのか、を明らかにする。

以上の(1)~(3)を通じて、ピグー財政論を「20 世紀イギリス財政論の古典」として復権させる。経済学史上の財政学の古典としてはスミスやリカードの主著が特に有名だが、ピグー

財政論を、そうした系譜の中に位置づけることは十分可能である。そのためにも、できる限り速やかにピグー『財政学』(初版, 1928 年)の邦訳書を出版する。この訳書は、将来の研究基盤の整備という点でも極めて有益なものになるだろう。

3. 研究の方法

(1) 20 世紀前半の各時期におけるイギリス財政の主要な課題と、ピグーの主要な政策提言を整理する。特に第一次大戦以前については新たに整備された社会保障制度(年金・医療保険・失業保険)の財源調達問題が、またそれ以後については膨大な戦時国債を処理する問題が、最も重要になると予想される。しかし、むしろこれら以外の、従来見落とされてきた重要な論点・視点を拾い集める。

(2) ピグー財政論上の主著『財政学』(初版 1928 年)と関連論文を精査する。当時の財政学の代表的教科書の 1 つであった同書全体の体系的な精査を通じて、財政学史上の彼の貢献と独自性を、特にその「理論分析」面に注目しつつ、明らかにする。従来の厚生経済学の研究では、分配論(例えば所得税や相続税による累進課税)に関心が集中しがちであったが、ここではその偏りを打破するため、資源配分論や景気変動論との関連も十分に重視する。

(3) ピグー財政論の形成・発展過程を究明するために、彼の主著著作、すなわち『富と厚生』(1912 年)、『厚生経済学』(初版 1920 年)、『財政学』(初版 1928 年、第 2 版 1929 年、第 3 版 1947 年)の比較をおこなう。そのさい、同世代の財政理論家との相互影響関係にも注目する。

(4) ピグー財政論に関連する以下の 3 つの個別論点をそれぞれ再検討する。いずれも従来あまり注目されなかった論点だが、現代の立場から見て非常に重要なものである。第 1 に、地方自治体の財政問題。第 2 に、社会保障政策の財政(特に歳入面)。第 3 に、公債発行と世代間平等の問題である。

4. 研究成果

(1) ピグーの主著著作、すなわち『富と厚生』(1912 年)、『厚生経済学』の各版(初版 1920 年、第 2 版 1924 年、第 3 版 1929 年、第 4 版, 1932 年)、『財政学』の各版(初版 1928 年、第 2 版 1929 年、第 3 版 1947 年)を比較した結果、ピグー財政論が当時の社会変動に応じて大きく展開していることが明らかになった。簡単に言えば、ピグー厚生経済学は、各時期のさまざまな課題や政策提案を、経済学的に分析することによって、形成・展開した政策論体系であり、したがって財政に関する

る彼の議論も、時論的性格をかなり強く帯びているということである。

(2) より具体的に言えば、ピグーの財政論は、彼の最初の主著である『富と厚生』(1912年、原書524頁)で初めてまとまった形で示された。同書は当時イギリスで進んでいた社会保障改革の試み(救貧法改革とリベラル・リフォーム)の影響を強く受けており、それとの関連(例えば財源調達方法など)で財政が論じられていた。ただし同書(全4編)では、まだ財政論が独立の「編」として扱われるまでには至っておらず、各編に財政論が分散している。それらの内容については、2012年に研究代表者が出版した同書の全訳書(本郷亮訳/八木紀一郎監訳『ピグー 富と厚生』名古屋大学出版会、2012年)によって、今では誰でも容易に知ることができる。

なお、同書の邦訳は日本で初めての試みである。この邦訳書出版は、単にピグー財政論の研究だけに関わるものでなく、ピグー厚生経済学体系全体の研究にとっての今後の基盤整備としても不可欠であり、加えて、ピグー厚生経済学を「福祉社会論の古典」として復権させるという本研究計画の最終的課題の達成のためにも極めて有用である。

(3) 上述の課題、すなわちピグー厚生経済学を「福祉社会論の古典」として復権させるという課題のために、主に歴史的観点から、論文「ピグー厚生経済学の形成と展開 福祉社会論の古典として」(西沢保・小峯敦編著『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房、2013年、139-160頁所収)を執筆した。

また同課題を達成するために、主に現代的観点から、「幸福 幸福度研究は経済学に革命をもたらすか」(橋本努編『現代の経済思想』勁草書房、2014年、61-84頁所収)を執筆した。ピグー厚生経済学体系を現代の立場から再評価するためには、現代的ツールが不可欠だが、私はそのようなツールの最有力候補として、近年台頭してきた幸福度研究(功利主義の進化形態)に着目した。国民の幸福度の向上を課題とする「幸福の経済学」と、国民の厚生を高めるための政策原論であるピグー厚生経済学とは、その学際性や、その背景をなす伝統的功利主義思想、などの点で顕著な共通性をもっている。加えて、ピグー厚生経済学に関する従来の評価では、「効用の基数性」や「効用の個人間比較」などの点が批判されてきたが、近年の「幸福の経済学」では、それらはむしろ肯定・評価される傾向が強い。このように、「幸福の経済学」の動向は、ピグー研究者にとっても重要な含意をもっているのである。

(4) ピグー財政論(あるいはより広くピグー厚生経済学全体)の発展・展開を考えるさい、その形成期には(すでに述べたように)同時

期に進行した社会保障制度の改革論や、第一次大戦(ならびに戦後の経済的混乱)が重要な時代背景となっているが、他方、彼の財政論が一応の完成に至った1930年代以降には、いわゆる「ケインズ革命」の影響を無視することができない。

特にピグー『財政学』第3版(1947年)の最大の特徴は、第3編「財政と雇用」というまったく新しい編の追加にあり、これは明らかに「ケインズ革命」への対応である。しかもその内容は、狭義の財政論の内容を越えており、むしろマクロ経済論ともいえるべきものであると言わざるをえない。この点は、本研究の遂行上、予想外の発見であった。ピグー『財政学』第3版(1947年)で新たな編が加わったことは、確かに従来から知られていた。しかしその具体的内容に関する研究は今のところ皆無である。本研究ではこの第3版を精査した(後述するようにその全訳完了も間近である)。その結果、「ケインズ革命」に対するピグーの対応・批判を究明するためには、彼の財政論(特に『財政学』第3版の第3編「財政と雇用」)の再検討が不可欠であることが明らかになった。つまり同書は、ピグー側の立場から「ケインズ革命」を論じるさいの必読文献である。この点は、世界的にも新しい知見・主張であるように思われる。

この『財政学』第3版の精査によって言うことは、ピグーの雇用論は、最初期の『富と厚生』(1912年)から『財政学』第3版(1947年)に至るまで、非常に類似点が多く、基本的にはあまり変わっていないようにさえ思われる、ということである。従来の評価では、1930年代以降のピグーについてはケインズからの影響が(当然のように)強調されてきたように思われるが、むしろ最初期以来のピグーの雇用論や公共事業論が、ケインズに影響を与えた可能性も濃いだらう。一例を挙げれば、失業対策としての公共事業論も、ケインズの発案によるものではなく、むしろピグー以来の伝統の中から「展開」したものであり、その意味で「ケンブリッジ公共事業論の展開」として把握する方が適切であるように思われる。

(5) ピグー財政論を「20世紀イギリス財政論の古典」として再評価するという本研究計画の課題に関連して、ピグー『財政学』第3版(1947年)の邦訳作業を進めている。この作業は、2015年5月末現在、全270頁中200頁まで進んでいる。

ピグー厚生経済学体系を構成する「3部作」の1つである同書の訳業は、厚生経済学の研究上も、啓蒙上も、非常に有効な手段である。同書は経済学史上、特に財政学分野の重要古典の1つである(と十分に言えるものである)にもかかわらず、その邦訳が今なお存在せず、この欠落を早急に埋める必要がある。実際、リカードの課税論は有名であるが、イギリスではその後(特に限界革命以降)

財政学分野における定評のある古典は存在しないように思われる。ピグー『財政学』の邦訳はこの空白を埋めることにもつながる。

ピグーの財政論上の主著である同書の邦訳書を出版することによって、彼の財政論の内容はおのずと多くの研究者の目に触れ、今後のさらなる研究が促進されるだろうから、それは本研究計画の目的に照らして非常に有益である。

本研究計画の究明課題であった、地方自治体の財政問題、社会保障政策の財政（特に歳入面）、公債発行と世代間平等の問題、などについても、むろん同書の中でピグー自身が論じている。

2015年度中には全体の邦訳が完了（草稿が完成）する予定であり、その後には訳文の推敲作業に十分時間をかけ（できる限り読みやすい良い日本語にしたい）、遅くとも2017年には出版する予定である。現在、研究代表者はこの作業に全力を注いでいる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3件)

本郷亮「A.C.ピグー「古典派の定常状態」(1943年) 邦訳と解題」査読なし、関西学院大学『経済学論究』第67巻第2号, 2013年9月: 177-196頁。

本郷亮「A.C.ピグー「善の問題」(1908年) 邦訳と解題」査読なし、関西学院大学『経済学論究』第67巻第1号, 2013年6月: 189-205頁。

本郷亮「A.C.ピグー「J.M.ケインズ氏の『雇用、利子および貨幣の一般理論』」(1936年) 邦訳と解説」査読あり、『弘前大学経済研究』第34号, 2011年12月: 115-131頁。

〔学会発表〕(計 3件)

経済学史学会・関西西部会(2012年12月15日・名古屋市立大学にて)

「合評会：経済学史学会ほか編『古典から読み解く経済思想史』(ミネルヴァ書房, 2012)』について」

『経済学史学会ニュース』(No.42, 2013年: 17頁)に報告要旨掲載。

経済学史学会・全国大会(2012年5月26日・小樽商科大学にて)

セッション「ピグー厚生経済学の再検討：『富と厚生』出版百周年」(組織者：本郷亮・山崎聡)

個人報告(本郷)「ピグー厚生経済学とは何か? 『富と厚生』の形成過程」

『経済学史学会大会報告集』(第76回全国大会, 2012年: 78-9頁, 94-100頁)に報告要旨掲載。

経済学史学会・関東部会(2011年5月21

日・早稲田大学にて)

「合評会：山崎聡『ピグーの倫理想と厚生経済学 福祉・正義・優生学』(昭和田, 2011)について」

『経済学史学会ニュース』(No.38, 2011年: 14頁)に報告要旨掲載。

〔図書〕(計 3件)

本郷亮「幸福 幸福度研究は経済学に革命をもたらすか」

(橋本努編『現代の経済思想』勁草書房, 2014年10月, 総ページ数623頁, 本郷執筆61-84頁)

本郷亮「ピグー厚生経済学の形成と展開 福祉社会論の古典として」

(西沢保・小峯敦編著『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房,

2013年8月, 総ページ数386頁, 本郷執筆139-160頁)

本郷亮訳/八木紀一郎監訳『ピグー 富と厚生』名古屋大学出版会, 2012年7月, 総ページ数469頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://bcbweb.bai.ne.jp/hongo/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

本郷 亮 (HONGO, Ryo)

関西学院大学・経済学部・教授

研究者番号: 80382589

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：